

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02655

研究課題名(和文) 18-19世紀文学におけるエンブレムの受容と変容に関する横断的研究

研究課題名(英文) Cross-sectional research on acceptance and transfiguration of emblems in literature in the eighteenth and nineteenth centuries

研究代表者

出羽 尚 (Izuha, Takasahi)

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：00434069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀に登場したエンブレムという媒体が、数世紀を経た18世紀、19世紀に制作された文学作品や出版、上演活動において、いかに受容され、そしていかに変容したのかを明らかにした。イギリスについては、ジェームズ・トムソンやアレグザンダー・ポウプの作品、スペンサーリヴァイヴァルにおける出版活動、エンブレム復興活動とシェイクスピアの出版活動や舞台上演活動、アメリカについては、メルヴィルの作品、また、フランスについては、文学作品の出版活動やルソーの著作やドレクリューズの批評文、そして、ドイツのクライストやゲーテと、国をまたいだ幅広いエンブレムの展開を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エンブレムと文学との関係は長く研究のテーマとなってきたところであるが、本研究の成果は、複数の国の文学作品を取り上げることによって、地域横断的に展開したエンブレムの影響を明らかにした点に加え、文学作品のテキスト分析のみならず、文学作品の出版活動や挿絵、さらには舞台上演活動にも注目することによって、メデア横断的にエンブレムが展開した様子についても明らかにした点に、とりわけ学術的意義を持つものである。

研究成果の概要(英文)：This cross-sectional research has traced how emblems which first appeared in the sixteenth century Europe were accepted and transformed in literary activities including literary creations, publication activities, and theatre performances in the eighteenth and nineteenth centuries.

The research has traced emblematic creations in different literary activities including; [Britain] Works by James Thomson and Alexander Pope, publications in the age of the Spencer Revival and the Victorian revival of emblem books; [America] Works by Herman Melville; [France] Literary works by J.-J. Rousseau and critical works by Delescluze; [Germany] Works by Goethe and Heinrich von Kleist.

研究分野：美術史

キーワード：エンブレム ウィリアム・シェイクスピア ハーマン・メルヴィル ジェイムズ・トムソン エドモンド・スペンサー ジャン＝ジャック・ルソー ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ ハインリヒ・フォン・クライスト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国外の研究動向

エンブレム研究は 19 世紀英国のエンブレム再興運動に端を発し、1970 年代のドイツにおけるエンブレム理論の整備、そして欧米でのエンブレムブックの復刻によって飛躍的に進む。

特に研究された領域はエンブレムの文学への影響である。20 世紀中頃までに、M.プラーツ (1934)、R.フリーマン (1948)、J.H.ハグストラム (1958) がエンブレムと文学の係に言及、その後、シェイクスピアなど近世英文学におけるエンブレムの影響を扱った P.デイリー (1979) を契機として、K.J.ヘルトゲン (1986) などの成果をうむことになった。

1986 年設立のエンブレム協会 (Society for Emblem Studies) の定期刊行誌 *Emblematica* でも、エンブレムと文学の係は特にルネサンス、バロックの時代を軸に研究が行われている。

国内の研究動向

エンブレムと文学については、分担者の松田による『シェイクスピアとエンブレム』(2012) が近年の代表的研究である。ここに至るまで、岩崎宗治『シェイクスピアのイコノロジー』(1994)、藤田實・入江文子『図像のちからと言葉のちから』(2007)、今西雅章『シェイクスピア劇と図像学』(2008) などの研究の蓄積があり、文学研究におけるテキスト読解にエンブレムが利用されてきた。分担者の山本も『《シェイクスピア》と近代日本の図像文化学』(2016) でシェイクスピアのエンブレムの解釈に踏み込んでいる。

一方で、20 世紀末頃から国外の研究の翻訳も数多く行われてきた。分担者の伊藤はプラーツの研究を『綺想主義研究』(1998) として、同じく分担者の松田はヘルトゲンの研究を『英国におけるエンブレムの伝統』(2005) として翻訳した。

こうした近年の研究を背景に、代表者と分担者を中心とメンバーは上記エンブレム協会の日本支部を組織し、研究会を 10 年近くに渡り継続してきた。その成果である松田編著『イメージの劇場 - 近代初期英国のテキストと視覚文化』(2014) や、『エンブレムの諸相』(2015) でもエンブレムと文学が議論されている。このように、近年活発化した国内のエンブレム研究、及びエンブレムと文学に係る研究は、本研究の代表者と分担者が牽引してきたと言ってよい。

代表者の出羽は、18 世紀イギリスのジェームズ・トムソンの詩作における挿し絵の研究を行ってきた。その過程で、挿し絵が詩行や図像だけではなく、寓意図像集を含むエンブレムブックの影響を受けた可能性と、詩の主題全体に対するエンブレムの教訓の影響を意識するようになった。例えば、トムソンが描いた寓意像に対するリーパ『イコノロギア』(英語版 1709) の影響、さらには、トムソンが扱った教訓的テーマへのエンブレムの影響の可能性である。あわせて、エンブレム協会の研究会での議論から、エンブレムの影響が 18 世紀以降の独、仏、伊、日の各文学へも展開していることを認識した。

先行研究が主にシェイクスピアやスペンサーらルネサンス、あるいはダンらバロック、すなわち 16-17 世紀の文学を対象にして、主にテキスト読解にエンブレムを利用してきたことを踏まえると、18 世紀以降の文学へのエンブレムの影響、そしてテキストは勿論、特に 18 世紀以降に数多くの作例を生む書物の挿し絵や、文学から展開した演劇におけるエンブレムの影響も、重要な研究課題になると考えた。

こうして出羽はトムソンを出発点に、18 世紀から 19 世紀前半までの英文学を材料に、16-17 世紀のエンブレムが如何に受容され変容したのかという研究課題を設定した。その過程で、エンブレムが地域や言語を広く超えて伝播している様子から、複数の時代や地域を扱うことによる包括的な目配りの必要性を感じ、共同研究という形でエンブレムが応用された文学を横断的に理解することを目的とした研究課題を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、エンブレムが 18-19 世紀の文学に与えた影響に注目し、16 世紀に登場したエンブレムの文化的遺産が如何に受容され変容したかを明らかにすることが目的である。

16 世紀に登場するエンブレムは図像と警句からなり、様々な教訓を伝えるメディアとして、美術のみならず、様々な時代・地域の文学にもその影響が認められる。

主に絵画と文学の絡み合いを対象とした二度の科学研究費の研究課題の成果を踏まえ、本研究では課題をエンブレムと文学の係に集中する。特に 18-19 世紀の文学作品に注目するほか、検討の対象を文学のテキストのほか挿し絵や演劇にも拡大し、多様な受容、変容の様子に注目する。そのために、以下の点に注目した研究を行う。

(1) エンブレムが文学に如何に影響したのかを明らかにする

エンブレムの影響はヨーロッパのみならず、日本にまで及んでいる。そして、エンブレムの登場から 300 年以上を経てもしっかりと確認できる。この影響の有様を個別の文学作品のテキストを精査することで、エンブレムの文化的影響力を明らかにする。

(2) エンブレムが挿し絵や演劇に如何に影響したのか明らかにする

挿し絵は 18 世紀以降に盛んに制作され、多くの作例を生んだ。挿し絵は文学の新たな表現として重要な位置を占め、テキスト同様の重要性を持っている。同様に、文学から展開した演劇も、文学表現の一メディアとしての重要性を有する。エンブレムの文学への影響を検討する上で、テキストのみならず、その派生表現である挿し絵や演劇を図像学の手法も取り入れて検討することで、エンブレムの影響力を明らかにする。

3. 研究の方法

平時は各研究者が分担課題についての研究を遂行し、年2回(9月、3月)開催するエンブレム協会日本支部の研究会(一般公開)で、成果を報告・発信することが基本作業となった。

研究は資料収集と資料分析、及び成果発表の三つが中心となり、具体的には、以下研究成果に記す個別の研究方法により、各研究者それぞれの研究成果を挙げ、研究会のほか、電子メールでの意見交換も随時行い、互いの調査・成果を共有した。

4. 研究成果

出羽はジェームズ・トムソンの教訓的主題とエンブレムの関係についての調査をする過程で、アレグザンダー・ポウプ、およびエドモンド・スペンサーの文学作品とエンブレムの関係にも注目するようになり、それらの挿絵、テキストの収集を行った。そして、アレグザンダー・ポウプの『髪略奪』の挿絵を伝統的なイコノグラフィーとの関係から分析し、ジョンソン協会の研究大会で発表した。また、スペンサーの挿絵については、とりわけ、18世紀以降のスペンサーリバイバル以降の出版活動において制作されたものについて、エンブレムとの研究を探る資料調査の過程で絵画作品との関連を見出すことができたが、エンブレムとの関係については、この調査の結果を経て、さらに分析を必要とする。

植月はウォールズとハーヴィーの『心臓』のイメージ、さらに形而上詩人、ダン、ハーバート、ヴォーン、クラショーの『心臓』のイメージ解析を行い、いずれもカトリック、アングリカンなどキリスト教の教義を色濃く反映したエンブレムになっていることが明らかとなった。さらに、メルヴィルの『白鯨』に登場する鯨のイメージの由来を辿った。メルヴィルは作品中で、エンブレムに関して、錨と海豚を描いた一枚に言及している。当時鯨も海豚も同類と見なされ、他のレヴィアタン退治の絵画や博物誌の挿絵なども重なり合って当時の鯨のイメージが形成されたことが明らかとなった。これを踏まえて、17世紀イギリスの詩人ウォラーの鯨表象と19世紀アメリカのメルヴィルの鯨表象を比較した。前者は人間に襲われる実際の巨大生物への憐れみさえ見られるが、捕鯨産業全盛時代の鯨は商品でありつつ、ロマン派の想像力によって人類の追求すべき究極の謎にまでなっている。ウォラーの作品が『白鯨』に与えた影響にも言及した。

松田は、19世紀英国のエンブレム復興運動に注目し、シェイクスピアの挿絵本を中心に考察を進めた。また、16~18世紀の「大陸」とイギリスのエンブレムの関連を追及するため、北イタリアにいたイギリス人イエズス会士の活動やバロック絵画について、フィレンツェで調査、アカデミア美術館などでエンブレムに通じる寓意画を収集し、プロテスタント派もカトリック派の図像利用に倣い視覚を用いた信心が特に家庭で実践されていたことを確認した。こうして、カトリック派とプロテスタント派の信心を巡るエンブレムや絵画を中心に考察を進め、その成果をシェイクスピア学会において発表した。

伊藤は18世紀フランス文学の扉絵の分析と、ヴィーリクス『愛するイエスの聖なる心』の解読を行った。また、オットー・ウェニウスの『ホラティウスのエンブレム集』の影響について研究するとともに、ホラポットの『ヒエログリフ集』を翻訳したほか、パラダンの『英雄的ドゥヴィーズ集』の翻訳と研究を行い、田中久美子氏との共訳によって同書は、2019年11月にありな書房より刊行された。また、ジョーヴィオの『戦いと愛のインプレッサについての対話』の翻訳と研究を行い、同書は2020年5月にありな書房より刊行された。

時田はクライストの短編『拾い子』における活人画的な要素を考察し、バロック小説『阿呆物語』の図像と作品内容の連関を明らかにした。次に、ゲーテの『ファウスト』第二部におけるホムンクルスについて、人造人間を造ろうとする試みの系譜を踏まえ、ゲーテが19世紀前半の生物学や地学など科学の進展と絡めて独自のホムンクルス像を造形したことを明らかにした。また、19世紀初頭のドイツ語圏で流行したメスマリズムに着目し、クライストの戯曲『ハイルブロンンのケートヒェン』を分析して、クライストのメスマリズム観を明らかにした。この成果はまもなく論文として発表される。クライストの図像との関係まで研究は進まなかったが、ゲーテが版画を手元に置いて図像のイメージを取り入れたことは論証できたので、『ファウスト』に関する既発表論文に加筆・修正を行った。

木村は、18世紀フランスを代表するエンブレム作家の版画家グラヴロの作品として、ルソー『新エロイズ』の挿し絵(1760-61年)として使用されているものを対象に、フランス文学における、テキストと版画との関係を調査研究した。さらに、19世紀における、美術史と文学との関係について、とりわけ、批評家ドゥレクリューズの書き残した文学性の高い批評を中心に調査を行い、論文を完成した。

山本はシェーネやデイリーの先行研究を踏まえ、主にシェイクスピアのロマンス劇の改作上演を扱って再考するために必要な文献を購入し、考察を深めた。そして、主に『ペリクリーズ』や『テンペスト』を中心にシェイクスピアのロマンス劇の改作上演を再考するために必要な文献を購入し、また大英図書館などで収集した資料に基づき、『ペリクリーズ』において旧約聖書の主題が独自に発展して様々な観客に受容されるようになる通時的過程に着目した発表を行った。さらに、レプトン(1752-1818)のイコノテキストに関する研究調査を行い、シェイクスピア作品を集めた『全集』(1791-1803)や『全集』(1858-60)の挿し絵表現とテキスト改変の関係からシェイクスピアのロマンス劇の改作上演を中心に、舞台装置や上演台本も参考にしながらシェイクスピア作品とエンブレムの背景の影響関係を考察した。

以上の3年間の共同研究の成果として、18、19世紀の諸言語、諸地域における文学作品の展開において、エンブレムがどのように受容され、そして変容していたのかという点が明らかにされた。エンブレムの文学における横断的な展開を明らかにしたことによって、このイメージとテキストからなるエンブレムという媒体が、様々な文化の展開を導いているというその影響力の大きさの一端を示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 出羽尚	4. 巻 46
2. 論文標題 トムソンの『怠惰の城』と怠惰の系譜（3）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 出羽尚	4. 巻 47
2. 論文標題 ポウプ著1714年版『髪の掠奪』の挿絵 ウェヌスのイコノグラフィーとの関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 38
2. 論文標題 ホムンクルスの冒険 ゲーテ『ファウスト』第二部第二幕	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 91-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月恵一郎	4. 巻 68
2. 論文標題 『白鯨』解説 造形芸術から見る文芸作品の二重構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村三郎	4. 巻 43
2. 論文標題 画家ブッサンと1614-19年のパリの出版史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日仏図書館情報研究	6. 最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤博明	4. 巻 53 (2)
2. 論文標題 スペイン語版「イソップ寓話集」と国字本『伊曾保物語』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要 (教養学部)	6. 最初と最後の頁 43-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤博明	4. 巻 48
2. 論文標題 セッサ・アウルンカ大聖堂のシビュラ像について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 専修大学人文科学年報	6. 最初と最後の頁 27-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤博明	4. 巻 102
2. 論文標題 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 専修人文論集	6. 最初と最後の頁 127-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 242
2. 論文標題 ピアキの最期 クライスト『拾い子』について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 36-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 時田郁子	4. 巻 37
2. 論文標題 怪物と移動 グリンメルスハウゼン『ドイツの冒険者ジンプリチムス』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 129-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 植月恵一郎	4. 巻 66
2. 論文標題 ハートのアート/アートのハート 形而上詩を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 出羽尚
2. 発表標題 挿絵から「見る」ポウブ
3. 学会等名 日本ジョンソン協会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 出羽尚
2. 発表標題 J・M・W・ターナーのジブシーを描いた風景画
3. 学会等名 関西コールリッジ研究会第179回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本真司
2. 発表標題 エンブレム化するコミュニティ：ヨナから『ペリクリーズ』へ
3. 学会等名 エンブレム協会第23回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 植月恵一郎
2. 発表標題 形而上詩の 心臓 を解き明かす エンブレムを視野に入れて
3. 学会等名 十七世紀英文学会関西支部第207回例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 出羽尚
2. 発表標題 ターナーの《アイサコスとヘスペリア》 『四季』の連想
3. 学会等名 美術史学会東支部例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村三郎
2. 発表標題 画家ブッサンとフランス17世紀の出版史
3. 学会等名 日仏図書館情報学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村三郎
2. 発表標題 ブッサンの、パリ在住、二十代の青春を考える・・・1621-23年を検証する
3. 学会等名 欧米言語文化学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本真司
2. 発表標題 テキストとイメージ、モノの饗宴 17世紀前半期英国バンケット・トレンチャーの文学的社会的効用
3. 学会等名 17世紀英文学会全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本真司
2. 発表標題 17世紀前半期英国バンケット・トレンチャーと応用エンブレム学の可能性
3. 学会等名 エンブレム協会研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 近世美術研究会編（木村三郎、出羽尚ほか分担執筆）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 416
3. 書名 イメージ制作の場と環境	

1. 著者名 金山弘昌、ダニエル・W・メイズ、市川佳代子、足達薫、喜多村明里、浦一章、伊藤博明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 446
3. 書名 黎明のアルストピア	

1. 著者名 足達 薫、遠山 公一、喜多村 明里、足達 薫、出 佳奈子、金山 弘昌、伊藤 博明、石井 朗	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 光彩のアルストピア	

1. 著者名 ホラポッコ、伊藤 博明、石井 朗	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 ヒエログリフ集	

1. 著者名 木村三郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 430
3. 書名 フランス近代の図像学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 三郎 (Kimura Saburo) (00130477)	日本大学・芸術学部・研究員 (32665)	
研究分担者	植月 恵一郎 (Uetsuki Keiichiro) (10213373)	日本大学・芸術学部・教授 (32665)	
研究分担者	松田 美作子 (Matsuda Misako) (10407611)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	
研究分担者	時田 郁子 (Tokita Yuko) (60757657)	成城大学・文芸学部・准教授 (32630)	
研究分担者	伊藤 博明 (Ito Hiroaki) (70184679)	専修大学・文学部・教授 (32634)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山本 真司 (Yamamoto Shinji) (80434976)	青山学院大学・経済学部・准教授 (32601)	